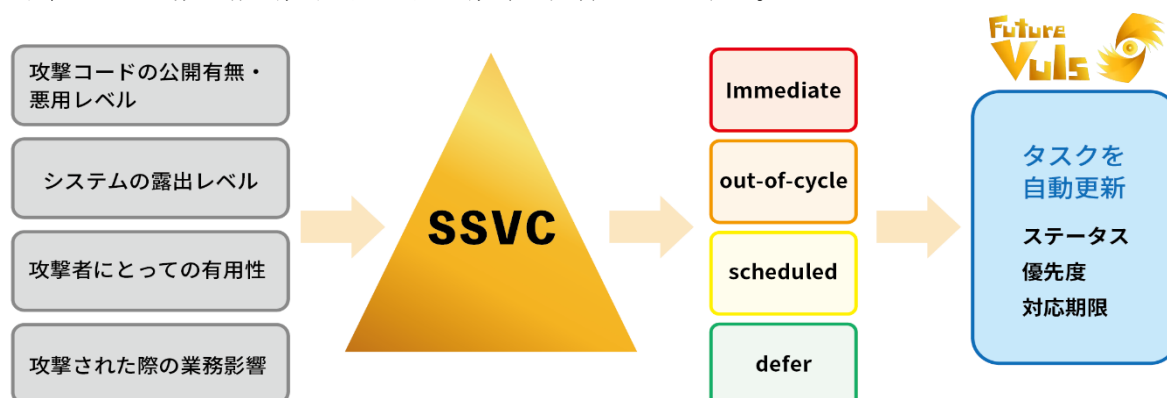


2022年9月14日
フューチャー株式会社
(東証プライム:証券コード 4722)

継続的脆弱性管理サービス「FutureVuls」に最新の評価手法「SSVC」を導入 リスクベースの「対応判断」から「対応指示」までを全自動化

フューチャー株式会社(本社:東京都品川区、代表取締役会長兼社長 グループ CEO 金丸恭文、以下フューチャー)は、エンタープライズ向けに独自開発した脆弱性管理ツール「FutureVuls」に、新たな脆弱性評価のフレームワーク SSVC (Stakeholder-Specific Vulnerability Categorization)をベースとした自動トリアーゼエンジンを搭載し、2022年9月13日にリリースしました。https://vuls.biz/features_ssvc.html

「FutureVuls」は、脆弱性情報が自動スキャンできる OSS (Open Source Software) の「Vuls」^{※1}をベースに、システムの脆弱性検知から情報収集、対応判断、タスク管理、パッチ適用といった脆弱性管理の一元化を可能にしたソリューションです。サイバーセキュリティ対策を重要視される多くのお客様に導入いただき、脆弱性管理の自動化による工数削減と効率的な運用に効果を発揮しています^{※2}。



「FutureVuls」はこれまで、オープンで汎用的な評価手法として共通脆弱性評価システム CVSS (Common Vulnerability Scoring System)を活用しつつ、評価数値だけでは容易に判断できないリスクについては、トリアーゼルールを定義したフィルタ機能などを実装することで自動化と省力化を実現してきました。

今回導入した SSVC は、米国カーネギーメロン大学によって提案された指標です。CVSS が評価数値を算出するのとは異なり、現場が取るべき対応レベルを 4 段階で導出できるため、脆弱性対応で最も時間を要する「トリアーゼ作業」が自動化され、大幅に負荷が軽減されます。さらに、リスク判断の専門的な知識がなくても瞬時に対応の緊急度がわかり、緊急度ごとの対応指示も自動化できるため、スピーディかつ安定的な脆弱性管理の運用が可能になります。

IPA 情報処理推進機構が公開した「情報セキュリティ 10 大脅威 2022」^{※3}においても「脆弱性対策情報の公開に伴う悪用増加」は、社会的に影響が大きい事案として取り上げられており、企業においても日々の継続的な脆弱性管理は重要な課題となっています。フューチャーは、今後も「FutureVuls」をはじめとした総合的なセキュリティコンサルティングサービスを提供するとともに、あらゆる業種・業界のお客様の経営と IT を両輪で支援し、未来に新たな価値を創造します。

※1. <参考プレスリリース> フューチャーの開発者が情報処理学会主催 2019 年度「ソフトウェアジャパンアワード」を受賞
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000396.000004374.html>

※2. 「FutureVuls」導入事例 <https://vuls.biz/case.html>

※3. IPA 情報処理推進機構「情報セキュリティ 10 大脅威 2022」 <https://www.ipa.go.jp/security/vuln/10threats2022.html>

■FutureVuls に関するお問い合わせ先

<https://futurevuls.tayori.com/form/1dd23480d6f0f7a0dd066f03be8ed7d1b41d10e7>

■本件に関する報道機関からのお問合せ先

フューチャー株式会社 広報担当:石井、小船 TEL:03-5740-5721